

2007年5月24日



立教大学  
総長 大橋 英五 殿

社団法人 日本建築学会  
支部長 片桐 正夫



### 立教学院 校宅 11・12号館の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、貴学院におかれましては、継続される池袋キャンパス再開発計画により、歴史的建造物である立教学院校宅 11・12号館を解体し、跡地に校舎を新築する計画である旨を伺っております。

ご承知の通り、この建物は宣教師館として J.V.W.バーガミニによって設計され、1931年（昭和6年）12月30日に竣工した、我国では希少な二世帯型シンメトリー形式のコロニアルリバイバル様式住宅で、近代建築史上も高く評価されるものであります。そのことは立教大学近代建築調査報告書（1985年刊行、立教大学近代建築調査委員会編）や総覧日本の建築（1987年刊行、日本建築学会編）、立教学院校宅2号館建物調査報告書（1996年刊行、内田青蔵博士編）にも記されるところであります。これら宣教師館の建築様式導入が我国の庶民住宅の近代化に少なからぬ影響を及ぼしたことは明らであります。

立教学院校宅 11・12号館は、木造総2階建（延床面積 456㎡）下見板張り白色ペンキ塗装の建物で、南北中心軸を基点にプラン・エレベーションはシンメトリーとなっておりますが、外観的には北面・南面並びに東西面の3面がそれぞれ異なるデザインとなるため、単体のコロニアル住宅として洗練されています。また、プランはミッション系宣教師館で見られる標準的な間取りが採られていたようで、1階には応接室・居間・食堂・台所が配され、2階には寝室・便所・バスルーム及びサンルームが設けられるなど、機能重視プランの面影を今に見ることができます。なお、内部装飾は質素なデザインを基調としてはいますが、木製階段やマントルピースなど、目を見張る部位も決して少なくありません。

池袋キャンパス東側のシンボルゾーンには、東京都歴史的建造物に選定される煉瓦造建物6棟が動態保存され、大学で積極活用されています。過去にはこれら歴史的建造物の解体の危機に際して保存要望にお応え頂き、現在は地域のランドマークとしても高い評価が成されています。しかし、これらゴシックリバイバル様式の煉瓦造建物群とセットで評価されるべき西側の宣教師館群に関しては、近年数棟が再開発計画のなかで解体され、現在は立教学院ライフスナイダー館と校宅 11・12号館しか現存しない状況にあり、遺憾と申し上げる他ありません。

以上のことから貴学院におかれましては、何卒、校宅 11・12号館の文化的意義と歴史的価値について改めてご理解頂き、是非、池袋キャンパス再開発計画のなかで存続に向けご検討くださるようお願い申し上げます。保存要望書をここに提出させて頂いた次第です。

なお、立教学院が所在する池袋キャンパスに関しては防火地域に属することから、文化財指定による保存も選択肢の一つに掲げられますが、日本建築学会と致しましても、できる限り協力致す所存である旨をここに申し添えます。

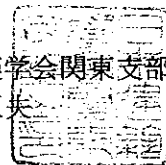
敬具



2007年5月24日

学校法人 立教学院  
理事長 小宮山 昭一 殿

社団法人 日本建築学会関東支部  
支部長 片桐 正夫



### 立教学院 校宅 11・12 号館の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、貴学院におかれましては、継続される池袋キャンパス再開発計画により、歴史的建造物である立教学院校宅 11・12 号館を解体し、跡地に校舎を新築する計画である旨を伺っております。

ご承知の通り、この建物は宣教師館として J.V.W.バーガミニによって設計され、1931 年（昭和 6 年）12 月 30 日に竣工した、我国では希少な二世帯型シンメトリー形式のコロニアルリバイバル様式住宅で、近代建築史上も高く評価されるものであります。そのことは立教大学近代建築調査報告書（1985 年刊行、立教大学近代建築調査委員会編）や総覧日本の建築（1987 年刊行、日本建築学会編）、立教学院校宅 2 号館建物調査報告書（1996 年刊行、内田青蔵博士編）にも記されるところであります。これら宣教師館の建築様式導入が我国の庶民住宅の近代化に少なからぬ影響を及ぼしたことは明らであります。

立教学院校宅 11・12 号館は、木造総 2 階建（延床面積 456 m<sup>2</sup>）下見板張り白色ペンキ塗装の建物で、南北中心軸を基点にプラン・エレベーションはシンメトリーとなっておりますが、外観的には北面・南面並びに東西面の 3 面がそれぞれ異なるデザインとなるため、単体のコロニアル住宅として洗練されています。また、プランはミッション系宣教師館で見られる標準的な間取りが採られていたようで、1 階には応接室・居間・食堂・台所が配され、2 階には寝室・便所・バスルーム及びサンルームが設けられるなど、機能重視プランの面影を今に見ることができます。なお、内部装飾は質素なデザインを基調としてはいますが、木製階段やマントルピースなど、目を見張る部位も決して少なくありません。

池袋キャンパス東側のシンボルゾーンには、東京都歴史的建造物に選定される煉瓦造建物 6 棟が動態保存され、大学で積極活用されています。過去にはこれら歴史的建造物の解体の危機に際して保存要望にお応え頂き、現在は地域のランドマークとしても高い評価が成されています。しかし、これらゴシックリバイバル様式の煉瓦造建物群とセットで評価されるべき西側の宣教師館群に関しては、近年数棟が再開発計画のなかで解体され、現在は立教学院ライフスナイダー館と校宅 11・12 号館しか現存しない状況にあり、遺憾と申し上げる他ありません。

以上のことから貴学院におかれましては、何卒、校宅 11・12 号館の文化的意義と歴史的価値について改めてご理解頂き、是非、池袋キャンパス再開発計画のなかで存続に向けご検討くださるようお願い申し上げます。保存要望書をここに提出させて頂いた次第です。

なお、立教学院が所在する池袋キャンパスに関しては防火地域に属することから、文化財指定による保存も選択肢の一つに掲げられますが、日本建築学会と致しましても、できる限り協力致す所存である旨をここに申し添えます。

敬具



2007年5月24日

豊島区  
区長 高野 之夫 殿

社団法人 日本建築学会 関東支部  
支部長 片桐 正夫



### 立教学院 校宅 11・12号館の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、豊島区に所在する立教学院におかれまして、継続される立教学院池袋キャンパス再開発計画により、歴史的建造物である立教学院校宅 11・12号館を解体し、跡地に校舎を新築する計画である旨を伺っております。

ご承知の通り、この建物は宣教師館として J.V.W.バーガミニによって設計され、1931年（昭和6年）12月30日に竣工した、我国では希少な二世帯型シンメトリー形式のコロニアルリバイバル様式住宅で、近代建築史上も高く評価されるものであります。そのことは立教大学近代建築調査報告書（1985年刊行、立教大学近代建築調査委員会編）や総覧日本の建築（1987年刊行、日本建築学会編）、立教学院校宅2号館建物調査報告書（1996年刊行、内田青蔵博士編）にも記されるところであります。これら宣教師館の建築様式導入が我国の庶民住宅の近代化に少なからぬ影響を及ぼしたことは明らであります。

立教学院校宅 11・12号館は、木造総2階建（延床面積 456㎡）下見板張り白色ペンキ塗装の建物で、南北中心軸を基点にプラン・エレベーションはシンメトリーとなっておりますが、外観的には北面・南面並びに東西面の3面がそれぞれ異なるデザインとなるため、単体のコロニアル住宅として洗練されています。また、プランはミッション系宣教師館で見られる標準的な間取りが採られていたようで、1階には応接室・居間・食堂・台所が配され、2階には寝室・便所・バスルーム及びサンルームが設けられるなど、機能重視プランの面影を今に見ることができます。なお、内部装飾は質素なデザインを基調としてはいますが、木製階段やマンツルピースなど、目を見張る部位も決して少なくありません。

池袋キャンパス東側のシンボルゾーンには、東京都歴史的建造物に選定される煉瓦造建物6棟が動態保存され、大学で積極活用されています。過去にはこれら歴史的建造物の解体の危機に際して保存要望にお応え頂き、現在は地域のランドマークとしても高い評価が成されています。しかし、これらゴシックリバイバル様式の煉瓦造建物群とセットで評価されるべき西側の宣教師館群に関しては、近年数棟が再開発計画のなかで解体され、現在は立教学院ライフスナイダー館と校宅 11・12号館しか現存しない状況にあり、遺憾と申し上げる他ありません。

以上のことから豊島区におかれましては、立教学院校宅 11・12号館の文化的意義と歴史的価値について改めてご確認願ひ、是非、池袋キャンパス再開発計画のなかで存続が適うようご協力をお願い申し上げます。保存要望書をここに提出させて頂いた次第です。

なお、立教学院が所在する池袋キャンパスに関しては防火地域に属することから、文化財指定による保存も選択肢の一つに掲げられますが、日本建築学会と致しましても、できる限り協力致す所存である旨をここに申し添えます。

敬具

2007年5月24日

豊島区

区長 高野 之夫 殿

社団法人 日本建築学会関東支部  
歴史意匠専門研究委員会

主査 大橋 竜太

委員 横山 晋一

### 立教学院 校宅 11・12 号館に関する見解

大正7年(1918年)、立教は東京における上級校として、逸早く都心より郊外にキャンパスを移転した嚆矢的存在である。創設者であるアメリカ聖公会の宣教師、チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教は「築地の中でも最も立派な建築」を念願に努力を重ねられたが、それは移転先の池袋の地においても意思が継続された。

キャンパスプランについては熟慮が成され、当時のアメリカでのキャンパス計画新傾向を踏まえ、東京西郊の武蔵野の景観にも配慮した建築計画とデザインが採用された。特にキャンパス東側に配置されるゴシックリバイバル様式の煉瓦造建物群と、キャンパス西側に配置されるコロニアルリバイバル様式の宣教師館群は東西主軸動線となる「鈴懸けの径」によって結ばれ、キリスト教学校ならではの信仰と教学と生活が重視される典型であった。

その宣教師館群のうち、立教学院校宅 11・12 号館はアメリカ・エピスコパル伝道局 PECUSA より派遣された建築家、J.V.W バーガミニによって設計され、1931年(昭和6年)12月30日に竣工した、我国では希少な二世帯型シンメトリー形式のコロニアル住宅で、近代建築史上も高く評価されるものである。プランはミッション系宣教師館で見られる標準的な間取りが採られており、1階には応接室・居間・食堂・台所が配され、2階には寝室・便所・バスルーム及びサンルームがあり、更には屋根裏部屋に倉庫が付帯する等、機能重視の平面が南北中心軸を基点に二世帯対称形で構成されている。内装に関しては質素を基調にしながらも、木製階段や木製扉・扉枠、また、マントルピース等のディテールに、コロニアルリバイバル様式のデザイン要素と考えられる装飾が用いられ、評価に値する。

一方、外観はシンメトリー形式でありながらも、北面・南面並びに東西面の3面がそれぞれ異なるデザインとなるため、下見板の外壁と相俟ってシャープな様相を醸し、単体のコロニアル住宅として洗練度は高い。

J.V.W バーガミニは American Institut of Architect の正会員として大正末頃に来日し、池袋キャンパス内にチャールズ・バトラー&ロバート・D・コーン建築事務所日本支所を設置した。その後、1932年(昭和7年)までに立教女学院・デスター邸・聖路加メディカルセンター・聖三一教会等を設計しているが、立教学院校宅 11・12 号館は彼が設計を手掛けた先駆的な存在であり、貴重である。

キリスト教普及のため、維新後より外国人居留地を始め各地に教会や宣教師館が挙って建設され始めるが、立教学院 11・12 号館のような二世帯型シンメトリー形式のコロニアルリバイバル様式の住宅は殆ど存在せず、近代住宅史上の視点からも貴重な存在であることは疑いない。この建物は立教学院の所有であると同時に、我国の文化遺産として将来に継承すべき歴史的建造物であると言える。